

**[A年] 降誕前第6主日(2020年11月15日)****【旧約聖書日課】申命記 18章15～22節**

15あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。あなたたちは彼に聞き従わねばならない。16このことはすべて、あなたがホレブで、集会の日に、「二度とわたしの神、主の声を聞き、この大いなる火を見て、死ぬことのないようにしてください」とあなたの神、主に求めたことよっている。17主はそのときわたしに言われた。「彼らの言うことはもつともである。18わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立ててその口にわたしの言葉を授ける。彼はわたしが命じることをすべて彼らに告げるであろう。19彼がわたしの名によってわたしの言葉を語るのに、聞き従わない者があるならば、わたしはその責任を追及する。20ただし、その預言者がわたしの命じていないことを、勝手にわたしの名によって語り、あるいは、他の神々の名によって語るならば、その預言者は死なねばならない。」21あなたは心の中で、「どうして我々は、その言葉が主の語られた言葉ではないということを知りうるだろうか」と言うであろう。22その預言者が主の御名によって語っても、そのことが起こらず、実現しなければ、それは主が語られたものではない。預言者が勝手に語ったのであるから、恐れることはない。

**【使徒書日課】使徒言行録 3章11～26節**

11さて、その男がベトロとヨハネに付きまどっていると、民衆は皆非常に驚いて、「ソロモンの回廊」と呼ばれる所にいる彼らの方へ、一斉に集まって来た。12これを見たベトロは、民衆に言った。「イスラエルの人たち、なぜこのことに驚くのですか。また、わたしたちがまるで自分の力や信心によって、この人を歩かせたかのように、なぜ、わたしたちを見つめるのですか。13アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、わたしたちの先祖の神は、その僕イエスに栄光をお与えになりました。ところが、あなたがたはこのイエスを引き渡し、ピラトが釈放しようとしていたのに、その面前でこの方を拒みました。14聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦すように要求したのです。15あなたがたは、命への導き手である方を殺してしまいましたが、神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。わたしたちは、このことの証人です。16あなたがたの見て知っているこの人を、イエスの名が強くなりました。それは、その名を信じる信仰によるものです。イエスによる信仰が、あなたがた一同の前でこの人を完全にいやしたのです。17ところで、兄弟たち、あなたがたがあんなことをしてしまったのは、

指導者たちと同様に無知のためであったと、わたしには分かっています。18しかし、神はすべての預言者の口を通して予告しておられたメシアの苦しみを、このようにして実現なされたのです。19だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。20こうして、主のもとから慰めの時が訪れ、主はあなたがたのために前もって決めておられた、メシアであるイエスを遣わしてくださるのです。21このイエスは、神が聖なる預言者たちの口を通して昔から語られた、万物が新しくなるその時まで、必ず天にとどまることになっています。22モーセは言いました。『あなたがたの神である主は、あなたがたの同胞の中から、わたしのような預言者をあなたがたのために立てられる。彼が語りかけることには、何でも聞き従え。23この預言者に耳を傾けない者は皆、民の中から滅ぼし絶やされる。』24預言者は皆、サムエルをはじめその後には預言した者も、今の時について告げています。25あなたがたは預言者の子孫であり、神があなたがたの先祖と結ばれた契約の子です。『地上のすべての民族は、あなたから生まれる者によって祝福を受ける』と、神はアブラハムに言われました。26それで、神は御自分の僕を立て、まず、あなたがたのもとに遣わしてくださったのです。それは、あなたがた一人一人を悪から離れさせ、その祝福にあずからせるためでした。」

**【福音書日課】マタイによる福音書 5章38～48節**

38「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。39しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。40あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。41だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。42求める者には与えなさい。あなたがたから借りようとする者に、背を向けてはならない。」

43「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。44しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。45あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。46自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。徴税人でも、同じことをしているではないか。47自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。48だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 申命記 18章15～22節

15あなたの神、主は、あなたの中から、あなたの同胞の中から、私のような預言者をあなたのために立てられる。あなたがたは彼に聞き従わなければならない。16これは、あなたがたが集会の日にホレブで、あなたの神、主に「私が死ぬことがないように、私の神、主の声を二度と聞かず、また、この大いなる火を再び見ることはないようにしてください」と言って求めたことによるものである。17その時、主は私に言われた。「彼らの言うことはもっともである。18私は彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立て、その口に私の言葉を授ける。彼は私が命じるすべてのことを彼らに告げる。19彼が私の名によって語る私の言葉に聞き従わない者がいれば、私はその責任を追及する。20ただし、預言者が高慢にも、私の命じていないことを私の名によって語ったり、他の神々の名によって語ったりするならば、その預言者は死ねばならない。」21もしあなたが心の中で、「私たちは、その言葉が主の語られた言葉ではないことを、どのように知りえようか」と考える場合、22その預言者が主の名によって語っていても、その言葉が起こらず、実現しないならば、それは主が語られた言葉ではない。預言者が傲慢さのゆえに語ったもので、恐れることはない。

## 使徒言行録 3章11～26節

11さて、その男がペトロとヨハネに付きまどっていると、民衆は皆非常に驚いて、「ソロモンの回廊」と呼ばれる所にいる彼らの方へ駆け寄って来た。12これを見たペトロは、民衆に言った。「イスラエルの人たち、なぜこのことに驚くのですか。また、私たちがまるで自分の力や敬虔さによって、この人を歩かせたかのように、なぜ、私たちを見つめるのですか。13アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、私たちの先祖の神は、その僕〔別訳→子〕イエスに栄光をお与えになりました。あなたがたはこのイエスを引き渡し、ピラトが釈放しようとしていたのに、その前でこの方を拒みました。14聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦すように要求したのです。15あなたがたは、命の導き手を殺してしまいましたが、神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。私たちは、そのことの証人です。16そして、このイエスの名が、その名を冠した信仰のゆえに、あなたがたの見て知っているこの人を強くしました。その名による信仰〔別訳→イエスによる信仰〕が、あなたがた一同の前でこの人を完全に癒したのです。

17ところで、きょうだいたち、あなたがたがあんなことをしてしまったのは、指導者たちと同様に無知のため

であったと、私には分かっています。18しかし、神は、すべての預言者の口を通して予告しておられたメシアの苦しみを、このようにして実現させたのです。19だから、自分の罪が拭い去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。20こうして、主のもとから慰めの時が訪れ、主はあなたがたのために定めておられた、メシアであるイエスを遣わしてくださるのです。21このイエスは、神が聖なる預言者たちの口を通して昔から語られた、万物が新しくなる時まで、天にとどまることになっています。22モーセは言いました。『あなたがたの神である主は、あなたがたの同胞〔直訳→兄弟たち〕の中から、私のような預言者をあなたがたのために立てられる。彼が語りかけることには、何でも聞き従え。23この預言者に聞き従わない者は皆、民の中から滅ぼし絶やされる。』24預言者は皆、サムエルをはじめその後には預言した者も、この日について告げています。25あなたがたは預言者の子であり、神があなたがたの先祖と結ばれた契約の子です。神はアブラハムに、『地上のすべての氏族は、あなたの子孫によって祝福される』と言われました。26それで、神はご自分の僕〔別訳→子〕を復活させ、まず、あなたがたのもとに遣わしてくださったのです。それは、この方があなたがたを祝福して、一人ひとりを悪から離れさせるためでした。』

## マタイによる福音書 5章38～48節

38「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と言われている。39しかし、私は言うておく。悪人に手向かってはならない。誰かがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。40あなたを訴えて、下着を取ろうとする者には、上着も与えなさい。41あなたを徴用して一ミリオン行けと命じる者がいれば、一緒に二ミリオン行きなさい。42求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。』

43「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と言われている。44しかし、私は言うておく。敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。45天におられるあなたがたの父の子となるためである。父は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。46自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるのか。徴税人でも、同じことをしているではないか。47あなたがたが自分のきょうだいにだけ挨拶したところで、どれだけ優れたことをしたことになるのか。異邦人でも、同じことをしているではないか。48だから、あなたがたは、天の父が完全であられるように、完全な者となりなさい。』

## 黙想のためのノート

## 次主日聖書日課について

・11月15日「降誕前第6主日」の日課主題は「救いの約束(モーセ)」。モーセは、旧約正典中、「出エジプト物語」の中心人物であるが、その役割には二つの側面がある。第一は、「囚われの人々を解放する神の救いの御業を指し示す」役割という側面、第二は、「御業により救い出された人々に神の律法を授与し、神の民として生きる道を指し示す」役割という側面である。

・モーセは、律法授与者としての特異的な存在意義を与えられているが、一方で、「レビ族」出身者として登場させられる点からも、「祭司～預言者」の伝統における祖師に位置づけられていることが明白である。歴史的には、「預言者」あるいは「先見者」と呼ばれるような宗教者がどのような社会的立場で活動した人々であったかは、時代や地域によって多様であったと考えられるが、旧約正典は、正典編纂に中心的に関与することになった「祭司・預言者」集団の伝統を基軸にして、古い伝承で知られる預言者らについて遡って同じ「預言者」の伝統の中に位置づけることを試みている。旧約正典の構成から推測されるのは、史実として、正典編纂に関与した「祭司・預言者」の伝統を継承してきた集団は、紀元前8世紀の北王国滅亡期に南北王国で活動したと考えられるイザヤ、ミカ、アモス、ホセアら預言者の預言活動を継承した集団であると考えられ、それ以前の預言者については、必ずしも直接的な伝統継承集団の存在は確認できない。しかし、正典編纂に関与した「祭司・預言者」集団は、イザヤらの時代より遡って、エリヤ・エリシャ、ナタン、サムエルなどを自分たちの預言者的伝統の中で理解し、位置づけて描き、さらに遡ってモーセおよびヨシュアを自分たちの伝統の祖とみなしている。その際に、同じ伝統を継承していることを示す一つの象徴的な「しるし」となっているのが、「神の箱」と結びついた「神の律法」である。実のところ、正典編纂の時代(バビロン捕囚からの解放後＝前6世紀後半)に再建が進められていた「第二神殿」に、「ソロモン神殿」の「神の箱」が確実に安置されている保証はなかった。「ソロモン神殿」は、バビロニア軍の侵攻によるエルサレム陥落によって破壊し尽くされており、「神の箱」の所在はすでに不確実になっていたからである。その、あるべきはずの「神の箱」に依拠して告げられるところの祭儀的伝承を、「祭司・預言者」集団は文書として編集・編纂した。その文書に正典としての権威を与えることで、「神の箱」に代わりうるものとしたのであろう。

・日課箇所は、モーセを「律法授与者」の側面ではなく「預言者」の側面からとらえた関連で選ばれている。そのとき、「預言者」は、「神の箱」や「律法の書」を前提にしながら「神の言葉」をより直接的に言明する者であり、主イエスもその意味で「預言者」と理解される。

## 旧約日課(申命記 18章より)

・「申命記」は、「モーセ五書」の第五巻で、「出エジプト記」から始まる「出エジプト物語」の終結部として置かれ、続く「ヨシュア記」で展開される「カナン定住物語」に接続される書として編纂されている。ただし、「出エジプト物語」の実質的なストーリーは、「民数記」末尾と「申命記」29章以下で接続しているとみなされることから、「申命記」の主要部分は、元来の「出エジプト物語」に割り込ませる形で組み入れられたものと推定される。その形式は、モーセの訣別説教で、最期の別れを前にこれまでのエジプト脱出から始められた荒れ野の生活を回想し、そこで授けられた律法を再確認するというものである。

・日課箇所は、17:4以下の「王に関する規定」、18:1以下の「レビ人および祭司に関する規定」に加えられる形で、「預言者」をイスラエル共同体の社会制度の中に位置づける規定を告げている。この関連で、直前箇所(18:9~14)では、イスラエル共同体の中で社会制度として認められない職制が列挙されている。

・ここで規定される「預言者」は、「モーセのような預言者」であり、明確にモーセの職務を継承する者として狭義に定義されている。実際、13:2以下では、一般的な意味で「預言者」を「夢占いをする者」と同列に扱って、イスラエル共同体から排除すべきものとして扱っている。日課箇所の「預言者」規定は、極めて例外的な「預言者」を想定していると言える。そして、ここで規定される「モーセのような預言者」は、結局、律法授与者としてのモーセの職務を果たす者として理解されているのである。こうして、「律法授与者」として「神の言葉」を語る「預言者」こそが真の「預言者」として認められる、という定式が示されるのである。

・しかしながら、一人の「預言者」を名乗る者が真の「預言者」であるかどうかを、どのように峻別できるのか、という問題が残される。「申命記」など旧約正典が編纂・成立して以後の時代には、おそらく「律法の書」および「預言者の書」として標準化された正典に照らし合わせてその「預言者」の語る内容の正否を判定することが可能になったのであろう。しかし、その時代に至るまでの過程の中で、「預言者」の真正性を判断することが問題となっていたのである。「エレミヤ書」28章では、まさにこのことが問題となった逸話として「エレミヤとハナンヤの対決」の出来事が語られ、エレミヤは、申 18:22 にほぼ倣った言葉で偽りの預言を判別する基準を示している。それは、結局のところ歴史の審判に耐え得た「預言」を真正とみなすという基準であるが、実際に「預言」のすべてが近い将来に歴史的検証にさらされるとは限らないという意味で、この基準は不十分である。「律法と預言者の書」が正典として確立していない状況下では、このような判断の揺らぎが繰り返し問題になったはずであり、そのこともまた、「律法と預言者の書」の正典化を後押ししたのだらう。

**使徒書日課(使徒 3章より)**

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続巻として編纂された、初代教会の正史文書である。この文書は、初代教会の活動の厳密な記録を残すためではなく、初代教会形成の事実を物語ることを通してその神学的基盤を示すことを目的としている。

・日課箇所は、最初のペンテコステ(聖霊降臨と宣教開始)の後、使徒たちが神殿境内で始めた宣教活動の中で使徒ペトロが人々に向かって語った説教として記されている。22節以下には「申命記」18:15以下が引用され、25節には「創世記」22:18等からの引用がある。これらの引用を用いて、主イエスが「モーセのような預言者」として遣わされた方であり、その語りかけに聞き従うべきことを告げている。

**福音書日課(マタイ 5章より)**

・「マタイによる福音書」の神学的立場は、「律法と預言者」の告げる「神の言葉」を「完成／実現・成就(プレオオー)」させる方として主イエス・キリストを示すことである。そのことをもともと端的に示しているのが「山上の説教」(5~7章)で、この中で主イエスは、「わたしが来たのは律法や預言者を…廃止するためではなく、完成するためである」(5:17)と告げている。日課箇所は、この「山上の説教」の中に置かれた、「あなたがたも聞いている通り」という定式で提起される律法解釈集の一部である。それは、単にラビ的な律法解釈として理解されてはおらず、預言者的な権威をもって、新たに神の言葉が語り直されたものとして位置づけられているのである。

・日課箇所前半(38~42節)は「同害報復規定」(出21:24ほか)に関して、後半(43~47節)は「隣人愛規定」(レビ 19:18)に関して、主イエスが、単なる解釈ではなく、一つの神学的視点(神は完全な方として人と共にあられようとする!)から、より徹底した神の教えとして新たに告げ直すことがされている。

**来週の誕生日 (11月15日~21日)**

**主日礼拝の讚美歌から**

・21-7番「ほめたたえよ、力強き主を」(= I-9番「ちからの主をほめたたえまつれ」)は、17世紀ドイツ改革派牧師で敬虔主義者シュペーナーと交流のあったネアンダーが死の年に発表した詩編 103 編に基づく歌詞。曲は古くからドイツで用いられてきた旋律で、ネアンダーが自作の歌詞のために選んだ。J.S. バッハがカンタータで何度か採用している。

・21-57番「ガリラヤの風がおる丘で」(= III5番)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともにうたおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・蒔田尚昊が曲を付した。

・21-390番「主は教会の基となり」は、19世紀英国教会司祭 S.J.ストーンが牧会教育上の必要から信仰告白「教会はキリストの体にして、恵みにより召されたる者の集い」に焦点を当てて作詞。曲は、C.ウェスレーの孫で 19世紀英国教会のオルガニストとして活躍したサミュエル・S・ウェスレー(チャールズ・ウェスレーの孫)が「黄金の都エルサレム(Jerusalem the Golden / Urbs Sion aurea)の歌詞に合わせて作曲したもの。21-101番も同曲。

**21-7「ほめたたえよ、力強き主を」**

**Lobe den Herren, den mächtigen König der**

1. Lobe den Herren, den mächtigen König der Ehren! / Meine geliebete Seele, das ist mein Begehren. / Kommet zu Hauf, / Psalter und Harfe wacht auf, / lasset die Musikam hören!
2. Lobe den Herren, der Alles so herrlich regieret, / der dich auf Adellers Fittigen sicher geführt, / der dich erhält, / wie es dir selber gefällt; / hast du nicht diese verspüret?
3. Lobe den Herren, der künstlich und fein dich bereitet, / der dir Gesundheit verliehen, dich freundlich geleitet; / in wie viel Noth / hat nicht der gnädige Gott / über dir Flügel gebreitet!
4. Lobe den Herren, der deinen Stand sichtbar gesegnet, / der aus dem Himmel mit Strömen der Liebe geregnet, / denke daran, / was der Allmächtige kann, / der dir mit Liebe begegnet!
5. Lobe den Herren, was in mir ist, lobe den Namen! / Alles, was Odem hat, lobe mit Abrahams Saamen; / Er ist dein Licht, / Seele, vergiß es ja nicht, / Lobende schliesse mit Amen!

**21-390「主は教会の基となり」**

**The Church's one foundation**

1. The Church's one foundation / Is Jesus Christ, her Lord; / She is his new creation / By water and the Word. / From heav'n He came and sought her / To be his holy bride; / With his own blood he bought her, / And for her life he died.
2. Elect from every nation, / Yet one o'er all the earth; / Her charter of salvation: / One Lord, one faith, one birth. / One holy name she blesses, / Partakes one holy food, / And to one hope she presses / With ev'ry grace endued.
3. Through toil and tribulation / And tumult of her war / She waits the consummation / Of peace forevermore / Till with the vision glorious / Her longing eyes are blest, / And the great Church victorious / Shall be the Church at rest.
4. Yet she on earth has union / With God, the Three in One, / And mystic sweet communion / With those whose rest is won. / O blessed heav'nly chorus! / Lord, save us be your grace / That we, like saints before us, / May see you face to face.